

アルバン アルフォンス エマニユエル アウレ

1. はじめに

私の名前はアルバン・アルフォンス・エマニユエル・アウレで、歳は31歳です。西アフリカにある面積322・462平方キロメートル、人口1600万の象牙海岸共和国の出身です。

私は神戸大学大学院経済学研究科の文部科学省の奨学金制度の一貫で、2001年10月4日に来日しました。日本に来たのは今回が2回国で、2000年2月に外務省主催の「アフリカにおける民主主義、紛争および発展」というテーマのシンポジウムに象牙海岸共和国を代表して出席したことがあります。この訪問はたった8日間でしたが、会議での交流はもちろん、東京、広島、京都へ観光できたことは私にとって貴重な経験となりました。私は日本の交通機関、行政サービスの良さ、また隅々まで行き届いた商業の流通網に驚きました。この訪問は残念ながら短いものでしたが、この国に再

び戻って、研究をしたいという私の思いは膨らみました。

そして、私は日本に留学することに決めました。たくさんの同胞のようにフランスやアメリカに留学するよりも、日本の大学で経済学を勉強した珍しいアフリカ人になってみようと考えたからです。

日本は私たちアフリカ人にとって、欧米の大国に対置した発展の象徴となっています。また、私たちは中高で日本の歴史と経済を勉強します。日本の電化製品は人気が高く、若者にとって日本製品を持つのはある種のステータスです。にもかかわらず、日本に行こうとするアフリカ人がほとんどいないのは、距離や言語、また日本という国に対しての間違った認識のせいです。

2. 日本での研究および生活

私の日本での留学生活は、神戸を拠点として、2001年10月4日から灘にある留学生寮で始まりました。妻と長女は翌年の4月に来日しました。

まず地域環境についてですが、日本、特に神戸は快適で住みやすい街です。

まず、交通網が発達しており、ダイヤは正確です。また、安全性の面でも私たちの国とは比べものになりません。私の国では、治安の悪い地域では22時以降ミニバスやタクシーの運行を行っていません。交通網に加えて至る所にあるスーパーやコンビニエンス・ストア、公共サービス（銀行、病院、通信網等）の充実さは日本での生活をよりよいものにしてきています。

次に人間関係についてですが、滞在期間を通して、私は友達の輪を広げることができました。6ヶ月間の日本語の授業を通して、留学生だけでなく日本人の友達もできました。また灘（2001年10月から2002年3月）やポートアイランド（2002年4月から2003年3月）の留学生寮では、様々な国の人との交流を通して、他の国の生活習慣などについて知ることができました。私は交流を通して、日本以外では特に、フィジー、ミャンマー、インドネシア、ウズベキスタン、タイそしてベネゼーラについて学び、アフリカの他の国の人々とも交流を深めることができました。

日本人と交流する方法として他に、大学や留学生センターのチューター制度やYMCAのホストファミリー制度

があります。これらの制度は、最初だけではなく今日でも、日本の生活になじむために役立っています。私が定期的に連絡を取っているホストファミリーは、私にとって本当の家族の様な存在です。彼らは私が一番つらい時に心の支えになってくれました。

また、他の国と違い日本人があまり人種差別をしない事は、私たちアフリカ系黒人にとって、とても嬉しいことです。確かにまれに失望させられることもありますが、他の国であるような明らかな人種差別、暴力、傷害などは日本ではほとんどありません。日本では、ほとんど黒人がいないため逆に、



私達は興味や注目の的です。

この3年間で私は色々なことを学び、伝えることができました。私はアフリカの文化、特に祖国の文化を、日常の会話や学生・大人向けのプレゼンテーションを通して伝えてきました。その代わりに日本語や日本文化、また他国の文化も知ることができました。さらに私は外国で生活する上で重要な、他者・文化への寛容さを学びました。

最後に日本での私の研究についてとりあげましょう。留学の選考試験で、大使館の方に日本で研究するに当たって、どのようにして言葉の壁を乗り越えるのかと尋ねられました。そのとき私は、今まで他の人がやり遂げられたのなら、努力と強い意志があれば乗り越えられはらずと答えました。日本に来る前は日本語を全く話せず、「こんなにちは」でさえ知りませんでした。しかし、6ヶ月の語学研修の後、大学院で勉強を始められるようになりました。試験とゼミ、論文が得意な英語だったのが私にとって有利でした。夫として父親としての責任を果たしつつ博士号を取得するためには、専門的な英語や、日常会話程度の日本語を習得し、さらには経済学についてより深く

理解しておくべきだったと思います。

大学院の講義はすべて日本語で行われているため、板書や本などを片手に授業についていきました。また授業内容についてまわりの生徒に聞いたり、それでもわからないときは教授に尋ねたりしました。試験のためには、沢山の英語の本や、インターネットで入手した文書で対処しました。こうして私は一番の障害である言葉の壁を乗り越えることができました。「為せば成る」という諺通り、一生懸命勉強することで、日本での研究を終えることができました。そしてこのことは私にとってすばらしい経験になったと思います。研究生生活を終えて、今の私の気がかりは卒業後の進路です。

3. 就職の機会

日本に来る前私は2年間講師をしており、博士号を取得している人が少ないこと、またこの分野に精通している人が少ないことを鑑みれば、今の私にとって自国の大学に就職することが妥当な選択と言えます。アフリカ諸国は私達のような知識を持った人が必要としています。さらに国が発展していくためには、知識を持った子供を育てて

いくことが必要です。私は帰国後、自国か他のアフリカ諸国に進出している日本企業で働きたいと考えています。私のフランス語と英語の知識、さらに少しの日本語と日本文化の知識は、就職するためのいい切り札になると思います。

ただ問題はアフリカ諸国の社会情勢が悪く、学生は国に貢献することよりもまず、自分自身が生き延びることを考えざるを得ないという点です。私の国も内戦状態にあり、貧困化、治安の悪化が進んでいるので、卒業後すぐ帰国することに不安を抱いています。

私の希望としては、1、2年ほど日本の企業や研究センターで働いて、大学で得た知識を実践的なものにしたいです。しかし私の日本語のレベルや企業の経済学への関心のなさから、日本で仕事を見つけるのはかなり難しいです。これからも希望を失わずに情報を探し、可能性があるならそれを最大限に生かしたいです。

4. 結論。および外国人留学生がよりよい生活を送り、さらに国際的な進路に進む道を広げるための提案

私は日本政府ならびに文部科学省、また私を歓迎してくれた日本の皆様、そして家族に感謝したいです。この3年間の日本での経験は一生の思い出になるでしょう。博士号を日本で取ることに決めて本当によかったと思います。専門分野についてだけでなく、新しい言葉や文化を知ることができ、これらの知識を今後も国、家族さらに自分自身のために役立てていければと思います。

ここで私は日本にいる外国人留学生にいくつかの提案をしたいと思っています。

勉強面についてですが、私は既存の組織だけでなく、新しく来た留学生に先輩留学生がその経験を提供できるようなグループを作るべきだと考えています。なぜなら、情報によっては既存の組織の人から与えられる物よりも、先輩留学生から与えられる情報の方が役立つことがあるからです。

私はすばらしいホストファミリーに恵まれましたが、すべての人がそうだとは限りません。もしホストファミリーになろうと考えている人がいるなら、自分たちが留学生に与える影響の大きさについて考え、進んで留学生

に時間をさいてあげて欲しいと思います。また、留学生には自分たちを受け入れてくれる環境や人を探すのではなく、自ら周りの環境や人々を受け入れていつて欲しいと思います。

私は、日本に來た留学生を分野ごと、地域ごとに分類して、新たなネットワークを作るべきだと思います。このネットワークは、日本での留学経験のある人々と連絡をとったり、交流するだけでなく、ホスト国である日本との関係を保ち続けることを可能にします。また、このネットワークに本部を

設け、日本の行政機関と連絡をきちんととれるようなものでなければなりません。このネットワークは日本に來た留学生が、世界各国の就職情報を収集したりするのに大変役立つでしょう。さらに、日本の企業が海外に進出するときにここで情報を得て、外国市場進出の道が開くことができるでしょう。

私は日本の経済状態が回復することをお願いしています。経済が豊かになれば、それだけ奨学金制度も増え、外国人、特にアフリカの学生が夢を叶えることができます。それに、日本人の就職の機会が増えるだけでなく、日本で勉強した外国人の就職の機会が増えます。そうすれば、財政並びに技術が発展し、先ほど提案したネットワークもより充実したものとなります。

最後にもう一度日本政府および協力してくださった日本の皆様に感謝します。

(Alban Alphonsse
Emmanuel Ahoure、

コートジボアール、

神戸大学大学院経済学研究科)

日本社会の高齢化が進むにつれて、外国人労働者に頼るべきか否かの議論がなされています。しかし、それならばまず日本での留学経験のある学生に日本で働く機会を与えてあげるべきではないでしょうか。